10 月第 1 週の礼拝説教

■日　時：2023 年 10 月 1 日（日）10：30－11：30　聖霊降臨節第 19 主日
■説　教： 保科けい子牧師
■説教題：「 愛され、召されて 」
■聖　書　新約：ローマの信徒への手紙 1 章 1～7 節（新約 p273）
■讃美歌：18「 こころを高くあげよ！ 」
　　516「 主の招く声が きこえてくる。」

本日の週報の「牧師室より」にも記しておきましたが、本日から始まる 10 月の 5 回の主日礼拝は、ローマの信徒への手紙の 1 章の前半をご一緒に読みたいと考えています。なぜなら、一年のうち今の時期ぐらいは、私たちプロテスタント教会の始まりである 16 世紀に起こった宗教改革について思いを新たにしたいと願うからです。1517 年 10 月 31 日、当時の神聖ローマ帝国（後のドイツ）のヴィッテンベルク大学神学教授のマルティン・ルターがヴィッテンベルクの城教会の扉に９５箇条の論題を貼りつけた出来事が大きな契機になりました。私自身、10 数年前にドイツのベルリン中央駅から特急に乗り、ヴィッテンベルクまで訪ねました。それほど大きくにぎやかな街ではなかったということが印象に残っています。そのように落ち着いた小さな街から始まったルターの行動の中心には、当時のカトリック教会が陥っていた様々な腐敗や堕落に抗議するということがありました。特にこの「抗議する者」というところから、「プロテスタント」と呼ばれる教会が誕生していきました。しかし、ルターの悩みの根本にあったのは、自分はどうしたら神の前に正しい者、義なる者として立つことができ、救いを確信することができるのだろうか、という深い問いでした。悩みぬいたルターは、人間は自分で正しさを獲得して義となるのではなくて、 神がその独り子イエス・キリストによって罪人である自分を赦して下さり、義として下さるという福音に出会ったのです。彼は、キリストによる赦しの恵みを信じる信仰のみによって、私たちは義とされ救われるのだという福音を、ローマの信徒への手紙の中に見出したのです。そこに、彼の宗教改革に突き進む原点があるのです。つまりこのローマの信徒への手紙が、宗教改革を引き起こし、プロテスタント教会を誕生させたと言っても過言ではありません。さらに、立川教会なども受け継いでいる信仰の基を打ち出した宗教改革者カルヴァンは、ローマの信徒への手紙について「この手紙を理解する者は、全聖書を理解する扉を開く」と語ったと言われています。そういうわけで、私たちの日々の歩みが聖書に親しみつつ信仰が少しでも深められていくようにと願いつつ、ローマの信徒への手紙 1 章を読んでいきたいと思います。

このローマの信徒への手紙は、後に大伝道者と呼ばれるようになった使徒パウロがまだ行ったことのない、当時の世界の中心都市と考えられていたローマの教会に集う人々

に宛てた手紙です。パウロが、これから訪ねようとしている自分のことを知ってもらいたいという思いで、前もって自己紹介をするために書かれたと言われています。彼は、主イエス・キリストの福音を語ることこそが自己紹介である、と考えていたようです。その思いは、この手紙の冒頭にはっきりと現れています。「キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となったパウロから」と１章１節にあります。先ず差出人の名を記し、次に宛先を記すのが当時の手紙の一般的な書き方でした。ですから、使徒パウロも差出人である自分のことをまず語っています。「僕」とは「奴隷」という意味の言葉です。パウロは、自分はキリスト・イエスの奴隷だ、キリストに身も心も全て所有されキリストのものとされているのだ、と言っているのです。それは決して、奴隷のように惨めな者だ、ということではありません。キリスト・イエスによって贖われ奴隷とされている自分は、同時に「神の福音のために選び出され、召されて使徒となった」者だと言っています。ここは原文の語順`では、「パウロ、奴隷、キリスト・イエスの、召されて使徒となった、選び出された、神の福音のために」となります。差出人であるパウロの名が最初に記されているのは当然のこととして、それに続いて、そのパウロとはどのような者であるかと記しています。私が本日の説教題に取り上げたのは、７節の「神に愛され、召されて聖なる者となったローマの人たち一同へ」からです。本来の手紙の書き方から言えば、こちらが宛先ですから、２節のところに位置付けられているほうが自然な形かもしれません。また、書き出しを簡潔にしようとするなら、「使徒パウロから、ローマの人たち一同へ」だけでもよいところです。しかしパウロは、自分が「神の福音のために選び出され」たことと、ローマの教会に集っている人々が「神に愛され」ていることは同じであると考えているのではないかと、私は思います。そのように、１節と７節は並行関係にあると読めるのです。ですから、「召されて使徒となった」ことと「召されて聖なる者となった」こととは同じである、と考えているのではないでしょうか。そのように、自分自身とまだ見ぬローマの人たちは、福音によって生かされているという一点において結ばれていると断言しているのです。私たちもまた、出自や今現在置かれている日常生活はそれぞれに異なっていますが、神によって愛されている、そして、同じ主の日の礼拝に召し出されているという一点においては一致しているのではないでしょうか。そこから、互いに「わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。」と祈りあう関係が生じているのだと思います。

２節以下は、そのように、パウロとローマの信徒たちを結び付けているもの、あるいは、今このようにして同じ礼拝に集っている私たちを結び付けているもの、さらに言えば、全世界に広がる主によって召し出されている人々を結び付けているものとは何か、ということについて語られています。それは１節で「神の福音のために選び出され」と語り出し、それを受けて、２節で「この福音は」と説明が始まる福音そのものであると

言えるでしょう。

「福音」とは「良い知らせ」という意味です。最初に、ローマの信徒への手紙は、「パウロ、奴隷、キリスト・イエスの」という順番で書き出されていることをお話ししました。そうしますと、何よりも先に「私パウロは奴隷である」と宣言するほどに、キリストの奴隷であることが、パウロにとってつらいことや苦しいことではなくて喜びであるということになります。そのことこそ、彼が告げ知らせている福音、喜ばしい救いの知らせの中心なのです。キリスト・イエスの僕、奴隷となって生きることこそ私たちの救い、私パウロにとっても、あなたがたローマの教会に集う人たちにとっても、さらには全世界の人々にとっても、後の時代の人々すべてにとっても、喜びであるということをこの手紙は語っているのです。キリスト・イエスの僕である、つまり、キリスト・イエスによって贖われた者は、キリスト・イエスに固く結ばれているのですから、他の何ものによっても主の愛から引き離されることはない、という究極の救いを最初に語っているのです。やがてこの確信は、ローマの信徒への手紙8章38節から39節へと大きく広がっていきます。「38 わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、39 高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」と声高らかに歌っているかのように、私たちに福音が迫ってきます。私自身が今、ここにあるのはこの御言葉によって50年以上も前に召し出されたからです。ですから、私自身も確信をもって、皆さんと共に、私たちの主キリスト・イエスによって示された神の愛に生かされて歩みたいと思います。